

人数から申しますれば、労働階級の方が多し、上流階級は、金は澤山あつたつて、人数は少ない、随つて、終には社會の富は、みな頭へ分配すべきものである、金持に獨占させないで、彼等の持つて居るものを、みんな奪つてしまはうといふことになります。露西亞が、昔は、所謂貴族、もしくは、富豪の手によつて、政治が扱はれてゐたものが今日は、政權が労働階級の手に移つてしまつた、所謂、職工や水夫が大臣になるといふやうな妙な變態を現はし來つて居ります。

そこで、金持の別荘でも、立派な邸宅でも、みんな労働階級の者が、これは俺の部屋にする、それはお前の部屋にしると、みんな奪つてしまひ、着物でも、何でも、さういふやうに奪つてしまつたのであります。

ですから、金持の持つて居つたものは、みんな奪られてしまつて、着のみ着のままで、實に、憐れな状態を續けて居るといふことになつて居ります。

中流階級がなくなつてしまつた後は、貧富の争ひが、甚だしくなつて、えらひ社會問題

が勃發するといふことになる、それを防ぐには、どうするかといふに、中流階級といふものを、多數に存在させるといふことが、最も必要であります。

中流階級がないと、一旦、労働階級に陥つてしまつた人は、永久に、上へ登ることが出来ない、丁度、梯子がなくて家根へ登ることが出来ないのと同じことでもあります。

下に居る者は、家を見て居るだけで、どうしても上へ登つて行くことが出来ない、そこへ梯子段を、こしらへてやれば、少しの努力で、中流階級へのぼることが出来る、そして中流階級は、少しの努力で、上流階級へのぼることが出来るといふことになつて、そこで勉強といふやうなことも、よく行はれ、所謂、努力の効果を、認めることになります。

しかるに、いかに働いても、到底、上へのぼることが出来ぬといふことになつたならば努力をする者が無くなつてしまふ、たゞ、モウ亂暴な時代が、そこに現はれて來るといふことになります。でありますから、どうしても、この中流階級を、だん／＼盛んにするといふ方針をとつて行かなければなりません。

そこで、この中流階級を盛んにするには、どういふ方面から、これを助けたらよいかと申しますと、矢張り、金融方面から助けるのが、最良の途であらうと思ひます。世の中に生活して行く上に、何よりも必要なものは、金であります。その金の方面から救済するといふのが、一番、良い方法ではなからうかと思ひます。この銀行は、夙に、眼をこの方面にそゝいで居るのであります。

そこで、如何にして金融方面から、中流階級を救済するか、といふ問題になるのですが従來の銀行は、各方面から集まつて來ました金を、まとめて、上流階級の人達に使はせて居るのであります。今日、各銀行の現状を見ますと、この程も、一流銀行の決算報告書を見ますと、各方面から集まつた預金の口数は、大層あります。數萬の人によつて、預けられてありますが、その集められた金は、僅かに、數百人に貸付けてあります。

さうすると、一人平均が、數千萬の金を使つてゐるといふことになります。數十萬の金を信用で借りてゐるか、擔保を出して借りてゐるか、いづれにしても、數十萬の金を借り

るといふ人は、中流階級ではない、まして、労働階級ではない、やはり、富豪か、所謂、上流階級の人達といはなければなりません。

多數の人が、汗水をたらし、一生懸命で、蓄めた金も、これらの人達には、何等の恩澤をも與へずして、その人達の商賣上の競争者とも稱すべき上流階級の人々の使用に供されてゐるわけです。

だから、上流階級、所謂、富豪階級の人、みんな中流階級が働いて貯めた金を、安く使つて、その結果はどうかといふと、小さな商人を、壓倒してしまふといふことになりま

す。これは、今日の金融組織がよくないからであります。このまゝにして置くと、自然に、貧富の懸隔を、甚だしくせしめるやうに出來てをります。

ズツと小さな銀行になりますと、高利貸的のやり方をして、下の方面に、金を貸してゐるやうなものもありますが、多くの銀行は、所謂、世間で一流といはれてゐる銀行、即ち

一番餘計に金の集まつてをります銀行は、その金を、みんな金持の手に、使はせるといふことになつて居りますから、金持は、大きな商店を開き、大きな會社を造つて、安く品物をこしらへて、充分に賣り出しますから、普通の商人は立ち行くわけがありません。私どもの銀行は、中流階級の汗水をたらして貯めた金は、上流の人に使はすといふことをしないで、やはり、この貯めた人達に使つて貰ふことにするのを本則といたして居ります。それが、この銀行の特色であります。

中流階級の金融機關

そこで、金を貯めるについては、普通の貯金では、實際、金は容易に貯まるものでないから、石の上にも三年、といふ辛棒をして、一定の金を、三年間、毎月貯金するといふ方法が出来たのであります。

さういふ堅い決心で、三年間、金をこしらへるといふ預金方法であります。たゞ、これだけでは面白味がない、それだけでは、たゞ金をためさせる機關といふのみで、融通の機關にはなりません。

金融の機關といふものは、金をためるだけではいけない、金をためさせると同時に、また金を貸すといふことで、初めて、完備した金融機關といふことになります。

多くの銀行は、偏つた金融機關で完備したものとはいへない、そこでこの銀行では、さういふ風に、一面から金をためさせると同時に、その貯めた金を、また、その人達に使つて貰ふと、かういふ組織になつて居ります。

さういふ組織であつてこそ、永久無限に、中流階級の味方として、大いに、役立つわけがあります。この銀行の三年貯金は、いづれも、さういふ組織になつて居ります。

普通の銀行でやつてゐるやうな、所謂三年貯金とは、自ら異つてゐるところでありまして、この趣旨が、よく徹底すれば、この機關が社會の人にどん／＼利用せられるわけであ

ります。

こちらから、お勧めせんでも、どうか貴行の三年貯金に入りたいから、是非、その仲間に入れて貰ひたい、といふて来られるわけでありませう。

今日、自活して、いろ／＼商賣なり、何なりで働いてゐる人は、いつ何時、不幸災難に遭ふかわかりませぬ。その時、助けを求めに行くところが、チャンと用意してあつたならば、どんなに心強いことだらうかと思ひます。

今、この世の中は、すべて競争ですから、競争に負けて、悲境に陥らぬとは限りませぬ。

たとへば、商人の場合でいへば、だん／＼、商賣の工合が悪くなつてくる、それを恢復するには、金が必要のことでありませう。また、何か見込があつて、それを仕入れるには金が急に欲しいといふこともありませう。その時に、他から金を借りて来るといふことは今日の社會組織では、なか／＼むづかしい、銀行へ行つても、無擔保では貸してくれない、擔保を出しても、初めての人達には、容易に貸してくれません。勢ひ高利貸に行くか、商

賣を失敗してしまふかといふ運命にあります。商利貸の金などでは商賣に使用するといつたところで、決して、割合に合ふものではなからうと思ひます。

さういふやうな金の必要があつた時に、人はどうするつもりであるか、更に、商賣の擴張などに使ふ場合以外にも、不幸とか、災難とかいふやうなことが、時々起つて参ります。その時にも、どういふ方面から、金を融通して来るつもりであるか、それ等のことを考へると、各人は甚だ心細き状態に居るのではなからうかと思ひます。

たとへば、商賣は、今日盛んにやつて居りましても、チャンといふ音が、聞えると同時に全焼になつてしまつた、裸體一貫で逃出したといふやうなことがないとはいへませぬ。

その場合に、他人の所へ行つて金を借りやうとしたら、他人は何といふか、

『あの人は、モウみんな焼いてしまつて、身體一つだから、金を貸しても、返しさうもないから、お断りしよう』

といつて断つてしまふ、中には、氣の毒だから、多少恵むつもりで貸してやらうといふ

位な話で、僅かの金は貸してくれるかも知れぬが、その金で再び商賣を立派にやつて行くといふことは出来ないと思ひます。

さういふ不幸に遭つた人は、最早、再び、中流階級に居ることが出来ずして、遺憾ながら、労働階級に陥ちてしまはなければなりません。

さて、一旦、労働階級に落ちると、なか／＼浮び上ることは難かしいものであります。そして、商賣を盛んにやつてゐる時には、人も助けてくれませう。「あの位の店を持つてゐるから、この位の金は貸しても大丈夫だらう」といつて、融通してもらはせうが、一旦、さういふやうな不幸災難に遭遇しますと、決して金といふものは、融通してくれないのが普通であります。

ですから、さういふやうなことが、世の中に絶対に無いとしたらよろしいが、さういふことがあると考へたら、誠に心細いわけではなからうかと思ひます。

その時に、不動貯金銀行に来て金融の相談をせられた場合に、わが銀行は、どうするか

と申しますと、私は喜んで貸してあげたい、今日まで、貯金を掛續けて来た、その信用に對して、その人に喜んで貸してあげたいと思ひます。

その金を借りた人は、どんなに喜ぶことでありませう。他へ行つて貸してくれないといふ時に、銀行に行つて話をしたところが、銀行では、喜んで貸してくれた、その時の喜びは非常なものでありませう。その金を、どんなに有難く感ずるであらうかと思ひます。

また、その人は商賣にとりついて、再び、以前の位地になることが出来ませう。

萬一、その人の力が足らずして、以前の位地に歸ることが出来ず、労働階級に陥つてしまふことになつたならば、その場合には、銀行が倒されることになりませう。

さういふやうな時の用意に、かねがね用意して、銀行は、多少の利子を附加して、とつて居りますし調査費もとつて居りますから、それらをもつて、慥かに埋合せがつく筈であります。

サラリーマンのために

また、月給取にしても、何日何時、給料に離れるか知れませんが、給料に離れた場合、すぐに、その日から困るといふことは、實に、心細い話であります。

しかるに、この銀行へ貯金をチャーンと掛續けて居つた人ならば、職に離れた場合に、銀行へ来て金を借りて、その金によつて、一時をしのごことが出来ませう。さういふやうな場合には、親戚へ行つても、知己のところへ行つても、なか／＼貸してはくれないと思ふ、立派に一つの職を持つてゐる時には、融通してもらへるかも知れませんが、その人が職に離れたとなると、なか／＼融通してはくれません。

勿論、悪いことをして職に離れた場合には、仕方がないが、何等の過失なくして、使ふ方の都合で職に離れる場合も多々ありませう。その場合にでも、なか／＼人は貸してくれ

一つの金融組合

ません。その時に貯金をして居つたといふ縁故で、借りられたら大變助るだらうと思ふ。その金で、衣食して行くうちには、また、再び職業にありつくことが出来て、もとの通り掛け續けて行くといふやうなことも出来ます。かやうな場合には、大變この金が役に立つことになります。

だから、萬一の用意のために、いますぐに金の入り要がなくとも、同じ貯金をするならば、この銀行にやつて置いた方が、萬一の時に役に立つて、安心であるといふことになります。

つまり、この預金者といふものは、一つの金融組合見たやうなものでありますから、この組合に入つて居れば、萬一の時には、大變助かつて、安心であります。

この銀行へ預ければ、萬一の場合に、さういふ特典があるから、利息のチツトや、ソツト位なことでは、とても、よそへ預ける氣は起らないだらうと思ひます。

今日、ニコ／＼貸金は、一億三千八百餘萬圓出て居ります。この借りてゐる人の數が、二十五萬以上になつてをりまして、それほど多勢の人が、この金を使つてをります。使つてゐるといふ事實そのものが、必要があるといふことを證明してゐる。即ち、一億三千八百萬圓の金を多數の人が借りてゐるといふことは、即ち、金を借りる必要があつて借りてゐるといふことが、現實に分つて居ります。

それだけの金が、中流社會の生産事業か、何かに、役に立つてゐるといふことがいへます。さういふ働きを、この銀行はなしつゝあるのであります。これが特色であります。

金の性質と金儲け法

金とは何か

朝から晩まで、金のために苦勞してゐる人間であれば、「金とは何か」といふ簡単な疑問に對して、明答を與へることが出来るであらう。

いま試みに、これを學理的に説明すれば、

『金とは通貨の總稱にして富財の一也』

ともいへるであらう。世人の多くは、金と富財とを混同して、金の外に富財の存することを知らず、富財は金より外になしと考へてゐる者があるが、それは誤りであります。

金は世人が争ふて、大いに貯へんとするものであるが、その巧拙によつて、非常なる差がある。貯金の巧なることを楽しんで金を集める人は、よく拜金宗の本義を解するものといへます。

世の中で、何が一番快樂みかといふに、人の出来ないことを、成した時の快樂である。何事でも、其成功した結果を樂まずして、成功を見るに至つた所以を樂しむべきである。端艇競争に勝負を争ふ人は、メダルを得んと欲するのではなくして、そのメダルを得るに至る勝利を欲するのである。得たメダルは人に與へてもよい、たゞ、其メダルを得たる勝利を樂しむべきであります。

金を集め得たる成功を樂しんで、決して、其得たる金に、執着してはならぬ。集めた金は、人に與へてもよい。たゞ其集め得た成功を喜ぶべきであります。

然るに、世には拜金宗の本義を誤解して、俗にいふ守銭奴なるものが多い。これは拜金宗の信者であると同時に、其賊である。彼等は、金を集め得た、勝利と成功とを樂します。集つた金にのみ向つて樂しむもので、金に執着して、終生金の奴隸となるものである。かゝる輩の集めた金を稱して、死金といつて、世に益する所がありません。

金の勢力

金を稱して、『萬能の神』といふ位であるから、その勢力の偉大なることが判るであらう。金は權利であり、生命であつて、金がなかつたら、この世に立ち難いのであります。

かくいへば、人はいふであらう。『學者は貧困の門より出づ』と。しかるに豈はからんや、金がなかつたら、文明教育の一片さへ受けることが出来ません。

たゞ、教育ばかりではない、すべての物、すべての事、いかに世は進歩し、發達したとするも、文明の光は金なき人の頭上を照らさず、文明の恩澤は貧困者には露はない。

また人は言ふ。『醫は仁術なり』と。しかるに金なき人のためには、少しも仁術の恵を受くること能はず、凡そ如何なる發明、如何なる進歩も、金なき人のためには、何物もたらされません。

金がなかつたなら、文明の餘澤を受くことが出来ないし、生命を保つことも出来ない。あと何ぞ、それ金の勢力の偉大なるか。

金の勢力は偉大なもので、人はみな、其前に低頭平身し、金の頤指に従ひ、東奔西走を辭せない。もしそれ、金の頤指に従はず、亭々として天に嘯くものがあるとするれば、それは少くも、狂人でなければ、偉人といふべきであります。

偉人は世に甚だ稀である。たゞ、似て非なる偉人は、しばく之を認めるが、其心事は一段と卑むべきであります。

金に執着すべからず

人間萬事金の世の中、浮世の義理としても、金に縁を絶つことは出来ない。この金に向つて、人の知るべき覺悟を擧ぐれば左の如し。

第一、經濟的に金を集めること。

第二、集め得たる其金に執着すべからざること。

第三、たゞ其成功を楽しむこと。

第四、經濟的と慈惠的とに散金すべきこと。

經濟的に金を集めることは、かの吝嗇家の貯金とはちがふ。人の盡すべき義務を盡し、人のそぐべき涙をそぐ、正理正道を踏んで我慾を張らず、凡そ、人として享くべき相當の娛樂は、敢て求めて人後に立たず、悠々その所を楽しんで、徒らに心を苦しめず而して、たゞ人に勝れたる才力と忍耐とを以て、自然に來る富を受くべきであります。

かの營々として、金の外に何の趣味も解せず、人並外れて粗衣惡食し、目には一點の涙をもたへず、爪に火を燈して金を集め、それを以て人生の楽しみとするものがあるが、その心事の陋劣なること、此上もない。

畢竟、この輩は、天地の大と自然の美とを解せず、人間の一生は、朝露と壽を同じうす

るといふことを知らないものであつて、憫むべきであります。

人は皆が皆、汲々として集金に勤めてゐるが、まづ自分が最初に、その目的を達して、澤山の金を備けた場合、人に勝れたるその才智と、技倆とを喜び、そうして、その成功を樂しむべきで、決して其の集めた金に執着心を持つてはならない。集め得た金は、まづ経済的と慈惠的なものとに分けて散金しなければなりません。

さすれば、その結果は、積善の家に餘慶あるが如く、また自然に金の集まるものである。集散常なく、しかして恒ありといふやうに、金は夜盡き晝來り、晝盡き夜來るといつたやうなものであります。

だから、金といふものは、終局がないといつても、かうした金の使ひ方、金に對するよき考へ方を持つてゐる者は、常に富の圓滿を得ることが出来ます。

経済的に散金すべし

いま、こゝで経済的に散金すべしといふのは、俗にいふ無駄に金を費やさないといふこととであります。金を投じて、四谷街道を修築した鹽原多助の行爲の如き、金を投じて、不毛の野に鐵路を敷設し、以て物産の増進を計るが如き、金を投じて、ドックを修築し、以て貿易の繁榮を計るが如き、金を投じて、校舎を新築し、以て人材を養成するが如き、金を投じて、不毛の地を開墾し、以て國益を増殖せしめんとするが如き事、これでありませう。

要するに、將來の効果を目して投金するのを、経済的な散金法といふのであります。経済的に放金するものは、その家は榮え、その國は強くなりませう。

慈惠的の散金

慈惠的の散金といふのは、鰥寡孤獨の不幸者を救助するがために、金錢を投ずるといつた、慈惠的な事業に放金することでありませぬ。

もし、富める人で、世の中の不運な人々を憫み救ふ慈心があつたならば、虚無黨などと云ふものは起らない筈であります。

世の中は平靜に、四海浪静かであることが出来る。人を救ふことは人のためではなく、つまりは、わが身のためであると思はなければなりません。

金儲けにも巧拙あり

何事にも、上手と下手との區別があり、その差は天と地との如き大きな差がある、たとへば、圍碁についても、本因坊のやうな名人もあれば、その本因坊に井目を置き、また、その人に井目風鈴つきでも叶はない人もある。其の階段等級は、非常に異なる者が多いのであります。

この圍碁のやうな一小局面の上においてすら、かれ一石を置き、われ亦一石を置くにも拘はらず、その結果においては、このやうな雲泥の相違があるのであるから、まして、この社會に立つて各々が輸贏を争ふもの、その巧拙豈圍碁の比ならんやであります。

即ち、舞臺は廣いし、役者は多い。千變萬化、虚々實々、誠に以て好觀物といふべきであります。

金儲けの上手なものに、ロスチャイルドの如きがあり、バンダービルドの如きがあり、紀文大盡の如きがあり、河村瑞軒の如きがあり、その他新しい時代に至つては、淺野總一郎、安田善次郎、大倉喜八郎、古河市兵衛等があつたが、これ等は何れも、空手にして皆

産を興した人達であつて、實に一世の人傑といふべきである。その間に、何か秘訣がある筈であります。

我も人も、日夜金儲けのためには肝膽をくだいて、金儲けに抜目が無い。

所が、その中には巨萬の富を重ねるものもあれば、また囊中無一物の貧的なものもあるのであつて、共にこれが金儲けのために心を苦しませてゐるのであるが、しかし、その差は、このやうに大きいのである。その間に、何か秘訣がなくてはなりません。

金儲けの秘訣

金儲けの第一秘訣は、まづ身體を健康にすることである。健全なる身心は、金儲け第一の基礎であります。

昔の貧的、今の長者といはれる人が、大概身體の健剛であるのを見ても判る所である。

身體が健全でなかつたならば、勇氣が出ないし、またこの荒浪の社會に立つて、人と輸贏を争ふことは、到底困難しいことである。たとへ争つたとしても、常に敗北を取ることが火を見るよりも明かなことであります。

身體が健全であることは、心の勇剛を意味するものである。心が勇剛でなければ、この世に立つことは出来ません。

社會は我利々々の者の集合體であるから、心が弱くては、その生命を保つことすら困難である。まして、商戰場裡の『チャンピオン』たることは一層困難であります。

多病を誇つた才子的時代は、既に過ぎ去つて、今は實力を闘はす時世に變つたのであるから、最も健全なる身心を有する人が要望せられてゐます。

勇氣と忍耐と機敏とは、みな健全なる身體に、やどるものであるといふことを知らなくてはなりません。

金儲け第二の秘訣は、世の中を廣く見ることである。今は昔と違ひ、千里も一里といつ

た世の中であるから、一局部のみに眼を注いで、大局を忘れるやうなことがあつてはならないと思ひます。

たとへば、圍碁に於てもその通りである。一局部の勝敗のみに眼を曝してゐて、全局について、達観する明がなかつたら、たとへ一局部に於ては勝利を得ても、大局に於ては、必ず失敗を招くものであります。

人事もこれと同じことである。一小天地の一瑣事にのみあくせくとしてゐると、社會の進運に伴はずして、終生小利に勝ち、大利を博する機会を失つてしまふ。これは憫むべきことであります。

世は日一日と進歩して、昨日物識りであつたものも、今日の物識りではないといふ時勢であるから、世の進歩に遅れず、文明の新事物に遭つて驚くことなく、よくその妙味をかみくだいて、その利益を利用することを怠つてはならない。廣く世の中を觀て、其の進運に伴ふものは、即ち金儲けの上手なものでありませう。

宇宙は大であり、天地は廣大無邊、文運の進歩は長足である。大局に眼を注いで、世界のどこで闘つても、力量に於て、敢て不足のないやうに覺悟しなければなりません。一地方に於ては小利を博し得ても、廣い世界に於て、輸贏をだに争ふことの出来ないやうな人物は、今の世の中では、共に語るに足らない。こういふやからを稱して、俗に商界の不具者と申します。

世の進歩に遅れず、世界の到る處に於て、世界の人を相手に勝敗を争ふものは、眞に商場裡の勇者であるといふことが出来ます。

第三の秘訣は、社會的な知識を多く藏蓄することである。知識は金を生む母であると思はなければならぬ。悲しいことであるが、吾々は金のために、二六時中離齷する我利我利の組織にかゝる、この不完全なる社會に棲んでゐる。世界の荒き所は、人情反覆の内

にありと悟らなければなりません。この人情反覆の間に處して、泰然として動かず、毅然として、その難所を切り抜けん

三つ
一、知識を蓄ふこと
二、人情を察すること
三、泰然として動かず、毅然として難所を切り抜けん

するには、まづこの人間世界の妙じき組織と、不道理なる作用と感觸とを窮めなくてはならない。人の悲しむ心も、笑ふ心も、喜ぶ心も、一見して其の奥底までも會得するといつた神通眼がなくてはなりません。

單純なる思想と、一片の道理とは、しばしば人情と衝突して、常に失敗を招く根本となるものである。若い者の最初の失敗などは、この最もよき見本であるといふことが出来ませう。

まづ、人といふものに就て、研究することが大切である。彼の笑ふのは、その心底におかしいことがあつて笑ふのか、それともおかしなくとも、心に或る一種の野心を以て笑ふものであるかを知る必要があります。

また、彼の喜ぶのは、心から喜ばしいことがあつて喜ぶものと、喜ばしいことがなくても、自分の外形を飾るために喜ぶものがある。或は、彼の悲しみも、果して眞實の悲しみであるか、心には喜んで、世間へのおせじのために悲しむものもあります。

かうした其の表裏の反目は人情の常である。それを知らずして、眞面目に世事を観察したならば、失敗續きを來すものであります。

次には、社會といふものに就て研究することである。社會の進歩は、複雑を意味するものであつて、進歩した社會は、複雑な社會といふことが出来る。この進歩した複雑な社會に、いやしくも輸贏を争はんとする程の者は、まづ社會に存する規則と機關と、運用の方法を知らなくてはなりません。

所が世の中には、これをよく知つた人といふものは尠いものである。これでは、どうして世の勝利者たることが出来ませう。

そればかりではなく、社會の規則を知らなかつたならば、社會の人となることは出来ない。社會の規則を知らないで、この世に生存する人は、丁度地理不案内の土地を歩くやうなもので、東西南北もわからず、歸るのにも往くのにも路がわからず、唯々其の岐路に彷徨するやうなものであつて、實に憫むべきことであります。

また、嘘へていへば、恰も闇夜に提灯を持たずに路を行くやうなもので、鼻を摘まゝれるのも判らず、手探りで、一步々を進めてゆくうちに、遂には溝に落ち込んで、大怪我を招くやうなものである。實に愚といふべきであります。

また、敵國と戦を始めやうとするには、まづ敵國の人情風俗、地理等について、これを辨へて置く必要があるのと同じことであつて、すべて、この世に立つて勝敗を争はんとする程の者ならば、人事に關する一般の法則を辨へて、少しでも拔りがあつてはなりません。

これは、たゞ人のために過まらぬ用意であるばかりではなく、自分の生命財産を保護する上に最要の武器と云ふべきである。その利は、護身刀やピストル以上であります。

社會に存する諸種の機關と、組織と其の運用法とを知つて置かなければならぬことは、何人も、異議を唱へないところであります。

然るに、案外世間といふものは、愚かなものであつて、世の進歩に伴はないで、新規の

事物を解得してゐない人が甚だ多い。社會自然の力によつて、漸く新事物を知るやうになるのが普通であつて、進んで、其の由來と作用とを研究して、他日の計に資しやうとするものはまづ少いのであります。

かやうな人の心得では、世界の全局に立つて、世界の人と輸贏を争ふなどといふことはとんでもないことであります。

近い將來には、自分の東隣に佛蘭西人が住み、其の西隣には露人が住むといった時代が來るかも知れないから、物事を深く考へて後に、悔むことのないやうに注意しなければなりません。

社會に存する諸種の機關について知らない者は、丁度、汽車汽船の便があるのを知らないで、昔のやうに、駕に乗つて道中をするやうなものである。社會に存する諸種の組織を解しない者は、たとへば、大阪に送金せんとするに、今の郵便を知らないで、危険な思ひしながら、舊來の飛脚に托するやうなものである。それ等は、實に愚なことといはなければ

ばなりません。

また、不可抗力の危険、即ち天災地變等の禍難を防ぐために、保険といふ方法があることを知らないで、たゞ天運にまかせてゐる馬鹿者もある。これも愚なことでありませぬ。

われ／＼は、かゝる社會に存する諸種の機關と組織とを了解し、かつ、これを運用する方法を熟知することを怠つてはなりません。

しかして、萬事を擧げて、自動的にやらなければならない。自動といふことは成功を意味する。すべての成功の如何は、自動に隨伴するものであるから、其の間の事情をよく心得て、率先して社會の機關を運用する概がなくてはなりません。

考へて見ると、社會に存する諸機關の組織と運用法を知らないで、常に他動的に動くのは、いつも人後に落ちて、一生涯浮ぶ瀬がない。かやうな者を、私は商界の盲目者といつて居ります。

更に、金儲けの秘訣として最も大切なことは、時間の努力とを空費しないといふことで

ある。時間と努力とは、金錢を意味するもので、時間と努力とを空費することは、即ち金錢を無益に費すのと同じであります。

ところが、金錢を浪費することは誰でもきらふが、この時間と努力とを空費することは左程念頭に置かない。これは、時間と努力とが金錢と同様に、尊いものであるといふことを辨へないからであります。

時間と努力とは、金錢を生む母であつて、金錢は時間と努力との子供であるといふことが出来る。子供を得ようとするには、まづ其の母たるものを求めなくてはなりません。

そして其の母たる時間と努力とは、一定の限りあるものであるから、ウカ／＼してゐると、捕まへることが出来ない。だから、力めて時間と努力とは捉らへるやうにしなければなりません。

人間の一生は、朝の露と同じやうなものである。幸にして、人生五十年といふ壽命を保つたとしても、この短い年月では、なか／＼何も出来るものではない。だからといつ

て、事の成らないのを以て、單にこの短い月日のためであるとしてはならない。天地の長
 久なことから打算すれば、人生の五十年は誠に短いものである。しかし、よく考へて見
 よ、およそ人のやる事業で、どんな事業でも、この五十年の月日をもつてしては、成就出
 来ないといふものがありませうか。

もし、五十年の歳月を費して、事をなすに足らないとすれば、それはたとへ、千萬年の
 歳月があつたとしても、その事業は成就するものではありません。

長命した人が、自分の過去をふり返つて見ると、其の一生は、茫として夢のやうなもの
 で、しかも遂に何事も成就しなかつたことを悟るのみでありませう。

だが、光づ試に過ぎた昔を考へて見よ、自分の一生が、如何に無益なことのみに費し
 た時間と努力との多かつたことを思ひ出すであらう。無駄に費した時間と努力とは、自分
 の一生の大半を占めてゐることを悟るでありませう。

だから、これが自分の一生は短かつたと思ふ所以であつて、これが即ち自分の一生に何

事をも成就しなかつた所以であります。

試みに、一日の中に空費する時間が、どんなに多いかを計算して見よ、何んでも、一日
 に五時間以上（この貴き、この大切なる、一度過ぎては歸らざるこの時間）を空費しない
 者は稀であらう。一日の中、無駄に費す時間が五時間位で済めば、まだしも其の人は勉強
 家の方であります。

相當の食事時間、休息時間、安眠時間は別に空費した時間とはいはない、これは自己の
 生命を保つ上に必要な時間であるからだ。私が一日の中に、五時間以上も時間を空費する
 ことがあるといふのは、それは労働すべき時間中に存してゐるといふことであります。

胸に手をあて、まづ一日中に成した事を考へて見よ、友人と空談のために費した時間
 はないか、何の効果もない事に費した努力はないか、妄想のために思ひを焦した時間はな
 いか。大いにあることに氣付くでありませう。

私は今假りに、大まけにまけて、一日の無駄時間を五時間とすると、一年間の總無駄時

間は、一千八百二十五時間となり、また人生五十年間の無駄時間を計算してみると、驚く勿れ、實に九萬一千二百五十時間となる。今、これを日數に直すと、三千八百二日となり年に直すと、約十四年半となるのであつて、人間が一生に空費する時間は、實に大きなものであります。

而してこの十四年の空費時間は、全く労働し得る時間であるから、この時間を有効に使用したならば、如何なる事も出来ないといふことはない。成功は、手に唾をして期すべきである。事の成らざるを以て、單に短日月のためであるなどといふ者は横着者であります。十四年の全き労働時間を得ようとするには、少くとも、三十六年の星霜を経過しなければならぬ。その理由は、いま假りに、一日の労働時間を、八時間と定めて計算したものであります。

だから、勉強する人は、不勉強の人よりも、總じて三十六年の長命をしたのと同じ勘定になるのである。これは實に愉快なことではないだらうか。

この計算から推して見ると、人生は徒らに長命するばかりが能ではない。要は、たと時間空費しないのにあります。

人は生れてから、一分間たりとも無益に費さないで、能く力めたならば、たとへ、不幸短命で、三十年にして死んだとしても、その成した事業は、普通の人の五十年間に成した事業と少しも變るものではない。時間を無駄に費さないで、有効に使用するものは、短命であつても短命ではない。時間を無益に費す人は、長命しても長命したことにはならない。時間を節して、よく力める人は、短命であつても、長命を保つたことと同じであるといへます。

無駄に時間を費さず、而して幸にも五十年の壽命を保つことが出来たとすれば、その人の成した事業は、まづ八十六歳の壽命を保つた人と同じことになる。八十六歳の時間は決して短いものではない。時間と努力とを最も有効に使用するに於ては、何事でも成就しないことはありません。

何も、早世したからといつて、悲しむことはない。要は、たと時間と努力とを無駄に費さないことである。徒らに年を累ねるばかりが能でもなく、幸福でもなく、または光榮なことでもありません。

かうした人の生命は、たとへ有形的には長命を保つたとしても、その生命は、事業を成すといふ上から大観すれば、既に死んだも同じことである。死んだも同じ心身で、何で世のために益する處などありません。

無駄の事に一分の時間も費してはならない。無益の事に一片の努力をも盡すことがあつてはならない。すべて自己の一生は、何事にも有効に費すことを忘れてはなりません。

時間と努力とを経済的に費すことは、即ち事業を成す根本となるものであつて、これに力めたならば、金銭と幸福とは求めなくとも、自然に得られる。金儲けの秘術は、これ以外にはありません。

金儲けの心得

いま、次に金儲けの心得となる大切な要點を列挙して見ます。

- 一、何事も無益に費すこと勿れ
- 二、收支を明かにすべし
- 三、克己の精神と正整の習慣とを持続すべし
- 四、金銭の漏口を堅く防げ
- 五、支拂は速かにせよ
- 六、大は小の積なるを知らざるべからず
- 七、決して急ぐ勿れ
- 八、忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法なり

九、相場と賭博とは断じてなす勿れ

十、金は活して使へ

十一、借金は多くは身を滅す

十二、親しき人より金を借る勿れ

これ等の各項を堅く守つて、よく實行するものは、福徳圓滿の長者となることは請合であります。だからといつて、人の性、多くは薄弱であつて、行は其の言と一致しないものであるから、一時はやつて見ようと奮發して其の氣になつても、直にダレて終ふが、こんなことでは、實に情ないといふより仕方ありません。

あゝ貧的！ いやだ、この境界を下したら脱けられようかといふものがあつたら、私は其人に對して、この各項をよく服膺して、唯々實踐せよと勸めるものである。

一、何事も無益に費すこと勿れ

『何事も』の三字に注意せよ、人はとかく金のみを、無益に費してはならないと教へる

が、私は單に金のみに限らず、一片の勞力も、一分の時間も、紙の屑も、木の片も、或はまた、一杯の水も無益に使つてはならないといふのであります。

何事も無益に費すことが無ければ、金持となることは、そんなに至難なことではないのであります。

二、收支を明かにすべし

収入と支出とを明かにして、収入の範囲内に於て、支出をなさなければいけない。闇雲にどうにかなるだらう主義は、最もいけない。月一圓づつ足りなくなつても、五十年目には、元利積つて三千九百四十四圓四十五錢五厘となる。實に驚くべきことではないか。

一家の經濟などは、我れ關せず焉などと言はずに、入るを計つて出づるを制し、其の按配宜しきに注意しないやうでは、とても國家の經濟などを談ずる資格は無い。磊落だなどと自らそれを氣取つてゐることは、最も悪いことであつて、自分も困らず、また人にも迷惑をかけないでこそ、初めて國家の事に身を致す資格の出来るものと言つてよろしい。

三、克己の精神と正整の習慣とを持續すべし。

まづ、第一に良心の命ずるまゝを進行して、情のため、慾のために横道に入らないやうに常日頃心懸けることが肝要である。己を制することの困難なことは、誰も認める所であるが、大に克己の精神を養つて、規律正しい習慣を作らなくてはならない。また、秩序を重んじ事物を整理する考へは、一日も念頭から離してはならない。即ち放埒は最も慎むべきことであります。

四、金錢の漏口を堅く防げ。

おあいといふが、これはよくいつたものである。この金といふものは、兎角逃げたがるものであるから、其の逃げ口はよく閉め切つて防がなくてはならない。少しでも心に油断があると、水や雪と同じで、自然に漏れて無くなる。用心することが大切であります。

五、支拂は速かにせよ。

お金があつても、支拂の悪い人があるものだが、これは泥棒根性といふものである。支

拂ふべき義務と、支拂ふべき力とを持つてゐるにも拘らず、支拂を難ずることは、いけないことである。支拂ふべきことがあつたら、最も速かにこれを支拂はねばならない。これこそ自己の信用を増す基であります。

六、大は小の積なるを知らざるべからず。

小さい事だからといつて、侮つてはいけない。小は即ち大の基であつて、小さい事をも慎まない人は、必ず失敗する。成功などは到底見られるものではありません。

小さいことだからといつて、これを棄てゝはならない。神武天皇時代の一厘錢も、若し今日迄利殖したならば、數字では表はせない程の大金となるのである。到底萬や億や兆の桁で數へることは出来ないものであります。

七、決して急ぐ勿れ。

これは、ゆるくと怠たらず、氣永に勤めるといふことである。コナ事は誰でも知つてゐることだが、實行しなかつたならば、知つてゐないのと同じことである。とにかく急

いではならない。絶えず、怠たらず、氣永に道中をすることでありす。

八、忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法なり。

これは當然のことで、別に改めて説明する程のことでもないが、要はたゞ、實踐窮行することにある。この實踐窮行といふことは、なか／＼困難なことであるが、といつて實行しなかつたならば、富者となることは一層至難である。洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず、富者となる秘訣はこゝにあるのであつて、ゆめ／＼疑ふやうなことがあつてはならないのであります。

九、相場と賭博とは断じて爲す勿れ。

僥倖を當にして、當を得ようなどと考へることは、大きな間違ひである。倖倖などといふことは、決して得られるものではない。既に射好心の存する者は、其の人の運命を豫知することが出来る。裏長屋の住居、垢の付いた衣物、口に三度の食事も辛じてと云つたものが、とゞのつまりである。また、かの仲買業を見よ、彼等は十年前も今日も大して身代

には違ひがない。或は賭博者を見よ、いつも質屋通ひは免れませぬ。

斯うしたことは、斷乎として排撃せねばならない。この忍耐と勇氣がなければ、先づ頼みにもならない人間であることを自覺しなければなりません。

十、金は活して使へ。

至難くいへば、金を生産的に使用することを云ふのである。何の効果も生じないやうな金の使ひ方は、死に金使ひといふ。碁に譬へていへば、無駄石を打つと同じで、無駄石が多ければ、其の碁はどれもこれも死んでしまふ。金の使ひ道にも、死活の二法あることを思つて、深く心に注意することが大切であります。

十一、借金多くは其身を滅す。

金を活して使ふ人が、借金をすることは少しも差支なく、反つて、利益をするものであるが、活して使ふ腕のない者が、借金をする位危険なことはない。それこそ、借金のために其の身を滅すやうなものである。たとへ、貸す人があつても、成算がなくては決して借り

るものではない。貧しいからといって、金を借るのは卑劣なことである。三度の食を二度に減しても、借金してはならぬ。生計の不足を補ふための借金は、返し得る見込がないからである。見込のないのに借ることは、既に其の人を倒す心がある。惜むべきである。

十二、親しき人より金を借る勿れ

金は、兎角争ひの種となるものである。人と交誼を永く保たんとするには、決して親しい人から金を借りてはならない。若し返済の出来ない時には、自然と足が遠くなり、果ては多年の情誼も破れるやうなことになる。注意しなければならぬ事であります。

貯金の必要と貯金法

何故貯金が必要か

人生僅か五十年、とは昔から言ひ古された語であるが、さて其の僅かの五十年も、所謂人生行路難で、なか／＼難かしいものであります。或人が唄つていふのに、

世の中は何の糸瓜と思へども

ぶらりしやらりて暮されもせず

實際、二十年三十年は、經つて見ると雑作もないが、さて、實際生活に關はつて見ると一年でも二年でも、案外容易なことではない、或時は風に吹かれ、或時は雨に曝され、難行苦行の數々を盡さなければ、安樂の彼岸に達することは出來ないのであります。

しかし、それがこの世の中の常態であるから、如何とも致方がない譯だ。そこで、人には不時といふことがある、病氣もそれだ、天災もそれだ、死亡、失職、失敗、悉く、不時

ならざるはない。

金森通倫さんの『貯金のすゝめ』に左の一節がある、よく此の間の消息を道破してゐるからこゝに抜萃します。

人は何故貯金をせねばならぬか、これが第一の問題、まづ此問題を解くと、貯金は自然に出来る、人には不時がある、病氣、天災、死亡、かういふ不時の出来事があつた時、他人の厄介にならず、家族を安全に養ふだけの用意が要る、給料取りは、いつ給料に離れるかも知れぬ、さういふ場合に、少なくとも三年位は、只居ても食へるだけの用意が必要、また主人の死んだ後でも、三年の用意があれば、その内には遺族の自衛も出来てくる、もし全くの不用意で一朝變に出逢つたら、それこそ、ニツチもサツチも行かなくなつて、忽ち他人の厄介にならねばならぬ。だから、一家の主人たるものは、豫てより不時に備へる、家族の保険金を用意するの義務がある。

貯金の幸福

さて、然らば貯金實行後の効果は果してどうかといふに、私は『貯金に三徳あり』と答へようと思ひます。

併し、三徳とはいへ、決して『貯金の効能』は三徳や十徳ではない。或は數へて見たら百徳千徳があらうと信ずる、が、こゝにいふ三徳なるものは、貯金といふ物質そのものによつて、直接利益を得るところのものではなく、間接に受くるところの利益であります。けれども、この間接の利益なるものは、却つて、直接受くるところの貯金の効能より、より以上の幸福を我々の人生に齎すものである。これがため、私は殊に貯金の三徳としてこゝに擧げたのであります。

前項に掲ぐる、天災其他の場合に、貯金によつて助けられたといふが如きは、誰でも認

むるところであり、また誰でもが承知のことであつて、貯金の徳として擧げるには、寧ろ當然すぎる程の當然であるが、こゝにいふ『貯金の三徳』なるものは、全くそれ以外ののであつて却つて諸君は意外の感に打たるゝであらうと思ひます。

然らば、その三徳とは何か、私はいふ。

第一、貯金をすれば身體健康である。

第二、貯金をすれば家庭圓滿である。

第三、貯金をすれば商賣繁昌。

諸君笑ふ勿れ、何で貯金をすれば身體が健康か、何で貯金をすれば家庭が圓滿か、それは以下説くところの各項によつて首肯せらるゝであります。

何故第一にこの項を擧げたかといへば、我々人生に健康程大切なものはないからである。

西洋の諺にも『健康は幸福の母』といつてゐます。

實にその通りで、この世に生れ出でて、不健康でくらすならば、全く以て、我々の人生

も何の意義をもなさぬと考へる。健康であつてこそ初めて、楽しさがあり、喜びがあり、面白さがあるのであります。

では何故貯金をすれば健康になるのかといへば、それも極めて簡單であります。

例へば、貯金を初める、その貯金は初めにいふが如く、必ず永續性のものでなければいけないのだから、その人は、絶えず貯金をするがために、活動を続けなければならない、活動を続ければ、イヤでもその人の身體は健康にならざるを得ないのであります。

このことは、私自身に於て経験もしてゐるが、私の經營してゐる銀行の従業者について見ても、ヤハリその効果が明らかに解るのである。實に不思議千萬な事實であります。

尤も、かつて、私がニコニコ主義を唱導しつゝある頃、ある醫學者の話しに、すべて世に處するに、樂觀をして、愉快に活動をすれば、我々の血液の一分子であるオスフォニンといふものが増すといふて教へられた。オスフォニンは人間の活動力の原子で、このオスフォニンが多量にあればあるほど、いよゝ愉快に活動ができるのださうであります。

だからオスフオニンを増加させようとするには、愉快に絶えず活動するに限るのである、しかし人は何等目的なしに活動は出来ぬものだ。そこで、どうしてもやらねばならぬといふ貯金を目標にして、毎日愉快に活動を続けるのであります。

たとへば、何年後には、此の貯金が何千圓になる、何萬圓になる、さうすれば、他人を頼ること無しに、現在の職業に離れても何の心配はない、この商賣に失敗しても、何等後顧の憂ひが無い、また其の貯金によつて、社會事業でも起して見よう、とか、人各自の希望に生きて、突貫して行かれるのであります。

かうすれば、即ち絶えざる緊張と絶えざる活動によつて、愈々益々身體は健康にならざるを得ない。これ何式の健康法にもよらずまた何等の藥物を用ひずして、こゝに立派な保健術の目的が達成せられるのであります。

さて、健康の次に來るのが何かといへば、『貯金をすれば家庭圓滿』である。このことは、殆んど説明を要するまでもなく、解り切つたことであるとは思ふが、一通りこゝに説

明します。

凡そ家庭の不圓滿程、我々の心を腐らすものはありますまい。

『家庭は人生の安息所なり』とは古人の金言であるが、その家庭が冷たく、『秋風や夫婦黙つて飯を食ふ』といふが如く、また冷たい風が家庭中に吹き荒んでは、この位の人生もつまらぬものはありますまい。

家庭不圓滿の原因はといへば、生活難から來るのであります。

貧窮の極、夫婦別れもせねばならなくなる、親子別々に居なければならなくもなる。

また不場合には、主人の放蕩から、さういふ悲しい結果を生む家庭もある。どちらも、

確かに、家庭の圓滿を破壊する、これが筋道であります。

しかるに、こゝに、貯金といふ目標を立て、それに猛進すれば、現在は貧窮でも、追々、富裕に向つて行く、これ第一。

また、貯金を一定の年限に續けて行かうとするには、毎日の活動を我々に要求するから、

時間に於て、他を顧るの餘裕がなくなる。易しいへば奥さん一人を可愛がる、否、その外に目を移して居る暇がなくなるのであります。

また一面には、金に於ても餘裕がなくなるのであるから、時と金が許さぬため放蕩は出来ず、これ第二。

眞面目に主人が働らいてゐれば、奥さんの方でもよく働き誠心から仕へざるを得ないといふことになつて、これはイヤでも應でも家庭は圓滿になる筈であります。

第三が商賣繁昌で、いふまでもなく、第一に身體が健康で第二に家庭が圓滿であれば商賣熱心に稼ぐから、自ら商賣が繁昌することは當然である。この三者は環のやうに輪をなし、いづれに行くも端はないのであります。

これを逆にしても、貯金をするから商賣に熱心であり、眞面目である。眞面目であるから、身體も健康である。家庭も圓滿であるといふことになる。であるからこの三者は一つであつて、その一つは『貯金』を出発點として解決される問題なのである。實に簡單明瞭

で、私はこれを稱して貯金の三徳といつて居ます。

どうすれば貯金が出来るか

貯金の必要が如何なる場合に起るものか、また貯金をしたら、果してどういふ効能があるものかといふことについて説述したのであるが、然らば、今後猶一步進んで『どうすれば貯金が出来るか』といふ問題に説き及ばうと思ひます。

抑々、貯金には、消極的貯金法と積極的貯金法との二種がある、この二つは恰かも車の兩輪の如く、二者相離るべからざるもので、もし、誤まつて、何れか一方のみに偏すれば完全な貯蓄は行はれないのであります。

しからば、先づ消極的貯金法とは、如何なることをいふかといへば、これを稱して、俗に、『搾り出し貯金法』といふ。

こゝに、その一例を挙げていふならば、

私共日常の生活上から、出来るだけの必要な物を省き、これを金にして積むのであるが、たとへば、今夜用事があつて、何處まで行かねばならぬとする。圓タクで行けば七十錢とられるが、電車で行つても、別に差支へないところでもあります。

だから、往復一圓四十錢の所を、往復十四錢の電車で済ませる。すると其處に、一圓二十六錢といふ餘りが出る。そのあまりの金を直ちに貯金として積むのであります。

また、帽子を買ひに行く、十圓の帽子にしたいと思ふが、どうも勿體ない氣がするから五圓の間に合せる、そこで五圓の餘りが出るから貯金にする。

殊に、煙草を喫む人などにとっては、可成りよい搾り出しの材料があります。

今まで一箱十五錢の朝日を喫うてゐたが、それを十錢の物に値下げをする。一日に二箱買ふとすれば、そこに十錢の餘りが出る、一日に十錢は何でもないやうだが、さて一月とたまり、一年と積つたら大きなものになる等々の類であります。

こゝに斷わつて置きたいことは、如何に消費の節約でも當然必要なものまで、約めるといふのではない、それでは、節約でなくて、吝嗇であります。

どうもこの節約と、吝嗇との間の區別がつきにくいと見えて、時々、誤まつた方法を實行してゐるのを見るが、甚だ残念な事である。このことについては後段に「眞の生活程度とは」と題して述べるから、こゝには省略することにします。

私のいふ積極的貯金法とは、例へていへば、こゝに、一時間働らけば一圓取れる人があるとする、その人の生活は、一日五圓かゝるから、五時間働らけば、即ち、その日暮し一ぱいの生活が出来ることになります。

ところが、感心なことに、この人は一圓六時間働らく、だから、毎日一圓の剩餘金が出て来るので一月続けると、三十圓の貯金が出来来る。まづ不時の用意はこれによつて出来ようといふものであります。

しかるに、私のいふ積極的貯金法は、これに輪をかけて働らけと命ずる。つまり一日六

時間働らけば一日一回づつ貯金が出来るとするならば、それ以上また一時間でも一時間半でも働らく、さうして、より以上の勞銀を得て、それを他日の爲めに備へる、所謂、さういふ風に積極的^{せつぎく}に骨を折つて貯金^{ちよんきん}をする、これを積極的貯金法^{せつぎくちよんきんぽう}といふ。一名、産み出し貯金^{うみだしちよんきん}とも稱へます。

消極的^{せうぎく}は消費^{せうひ}の節約^{せつぎやく}によつて、金を搾り出すのだが、積極的^{せつぎく}は極力^{ごくりきょく}働いて、金を得てそれを溜めるのである。一方^{いほう}を女性的^{ぢよせい}とすれば、一方^{いほう}を男性的^{だんせい}といへる、ドチラもなくてはならぬ貯金法^{ちよんきんぽう}であります。

僅かに、一日に一時間の差でも後に大へんな差がある。しかるに人間の一生は短かしくいへども、一年は三百六十五日である、十年は三千六百五十日である、人の働らきざかりを二十年と見ても、七千三百日ある、七千三百日善用したら、一體どんなことになるだらうか、到底ソロバンの桁では出て来ない程の大きな利益が湧いて来ると思ひます。諸君、一日の善用も、その結果は實に恐るべきものではないか。

一體、世の中で成功してゐる人も、成功しない人も、別に一日の時間には變りがないのである、成功者の一日が二十八時間で、不成功者の一日の時間が十時間ではないのである同じく二十四時間は二十四時間で、三度の飯を食うてゐるに過ぎない、ところが、成功不成功の岐るところであります。

眞の生活程度とは

勤儉貯蓄^{きんけんちよく}を履き違へると吝嗇^{りんしやく}になる。だから、このことは餘り獎勵は出来ぬ、といふ人がある。かういふ議論は甚だ奇怪な譯で、私共は義理にも御尤ともとはいへないのである。では、我々がこの世に處するに、どうしたらよいかといへば、難かしい學問的なことは省き手取早くいへば、

『人各自其分に應じて生活する』

といふことである。至極簡單であります。

が、さて、しからば、どの位の程度を以て身分相應といふかといへば、それが、チト面倒で、其の人々の、収入と地位と、家族の多少、その外いろいろな事情によつて異なつては来るが、大體に於て、私は、

収入の一割以上は必ず貯蓄にせよ。

といふものである。たとへば、毎日五圓の日當に當る人ならば、その一割の五十錢を貯蓄するのである。十圓の人ならば、一圓を蓄へるのであります。

一割を差引いて残つた金でその日の生計を營なれば、十日にして一日分の餘裕を生み、百日にして十日分の餘裕を生むのである、かくの如くして三年五年、或は十年二十年と積んで行くならば、それこそ病氣死亡天災等のことが起つても、その他の災難に遭ふといへども、ピクともしない所謂不動の状態になるのである、だから、其處で初めて安心が出来るのであるが、全然其の日暮しをして居るならば、到底それは何百年経つともそれは望め

ないことなのであります。

けれども、この教へによらず、身分以上にくらすものは、それを贅澤といひ、また極度に身分以下にくらすものがあるならば、それを吝嗇といふのである。この事は餘程、我々は日常に心しなければいけないのであります。

要するに身分不相應なことをするのがよくない。自家用の自動車で、走り廻つてゐる人もあらう。しかしそれは、贅澤で乗つてゐるのではないかも知れぬ。先から先へと、用事があつて、用務を果すには、どうしても自動車によらねばならぬかも知れぬ、もしくはまた、その人は、自動車にのることが、普通の人の電車よりも猶相當であるのかも知れぬ。殊に、目前の成功のみを見てゐるから解らぬが、自動車に乗るまでの、その人の苦心は一朝一夕ではなかつたかも知れぬ。またこれと反對に金持が貧乏人の眞似を、一から十までしてゐるならばそれを吝嗇と言ふ、これも誠によくないことであります。

經濟の原則に従へば、需要があつて、供給があるので、もし金持にして、貧乏人と何等

異なることなく、絶對に金を死藏してゐるならば、それは恰も無きに等しきもので、金持とはいへぬのであります。

さらばというて、俺は金持だ、何でもしてよいと考へては困る。如何に自分の金だからというて、それを悪用すると、善良なる風俗を素すことになる、これ即ち悪事なのである。人間と生れて、悪事はすべきでないことは、金持も貧乏人も、同じことであります。

殊に、無くてもよい寶石を身體中にピカ／＼させたり、あらでもと思ふ、洋酒をボン／＼抜いて、滅茶々々に呑んだりするのは、愚の骨頂といはねばなりません。

元來 さういふことは、たとひ、金持が行なつても、貧乏人が行なつても、誰が行なつても贅澤なことで、要するに、そのことによつて、我々の生活の實質は、何等良くはならないのである。だから、奢侈であり、贅澤であるといへます。

この身分相應の生活といふことを、つまり『合理的生活法』とでもいはうか、また、或意味においては、文化的生活ともいふものであります。

要するに、金持は、貧乏人の如き生活をしてはならない。たゞ、金を悪用せぬやうに、身を慎んで善用されたい。

また、貧乏人は、勤儉努力して、貯蓄し、然して、生活の向上發展を期して貰ひたい。以上の理窟を、もう一層砕いていへば、十の收入に對して、十を費やしてはいけなはいふ事である。八、若くは七にして、残りの二乃至三は後の爲めに貯蓄せよといふのであります。

貯金に時なし

或人はいふ『不景氣だから貯金は逆も出来ませぬ』と。

また或人はいふ『どうも景氣は好いが貯金する金はない、借金も返さねばならず、また買物もせねばならず』と。いや、何れも誠に立派なお心懸けと申さねばならぬが、さて私

から言はせると、イヤハヤ、誠に不心得千萬なお方々だといひたくなります。

なぜならば、第一、不景氣だから貯金が出来ぬ、といふのが大きな心得違ひである。不景氣であればこそ、貯金が必要なのではあるまいか。

諸君、不景氣の時、金廻りのよくないことは、世間普通である。けれども、貯金が出来ないといふことの遁辭にはならないのであります。

さて、景氣が好くて貯金が出来ぬといふのは、これこそ、不景氣で出来ぬといふよりは猶一層奇怪な譯である。景氣の好いときに、そんな口實を設けて、成るべく貯金をしないやうな算段をするから、結局不景氣風が吹いて来ると、直ぐに頭痛鉢巻で、ウン／＼いひながら、大切な電話までも賣りたいといふのだ。飛んだ不心得といはざるをえない。

私は景氣の好いときこそ、思はぬ儲けもあるのであるから、所謂「勝つて兜の緒をしめよ」昔家康は小牧山の戦ひに勝つたが、決して追撃をしなかつた、これを見て老臣が「何故追撃しないのですか」と聞くと「後日の爲めに備へたいからだ」といつた。さすがに家

康は名将であつた。だから、さういふ時こそ腹帯をキユツと締めて、少し大口の貯金を初めて置かねばいかぬと説くものであります。

しかるに、どういふものか、景氣の好いときは、往々にして貯金の出来ぬ輩が多くあるのであります。これを金森さんに言はせると「大漁後の借金残り」というてゐられる。成程面白い言葉で、たとへば、大漁で金が儲かるので、思はずその景氣に浮かれて、餘計な金を使ふのである。だから、入つて来る金よりは、出る金の方が超過して、其處に借金が残るのであります。

貯金に必要な三條件

世の中には、全く空漠の間に成し得らるゝものは一つもない。僅かに道を歩くにしてか

て行くか、行つてから何をするか、かう考へて、家を出たに違ひない。さうして、戸外へ出て見ると、知つて居る人に打付つて、道草を食うてゐたゝめに、先方へ着く時間が後れたり致します。

また、途中で自動車や電車に故障が出来たりして、思はぬ手間をとる。それでも、漸く目的地に着いて見ると、會はうと思つた人が生憎不在であつたりする。かういふことは、私共の日常生活には、殆ど毎日のやうに繰返されることで、敢て稀しいことではないが、さて、貯金をするにしても、ヤハリ、それに對する、いろ／＼の目標といふものを定めなければいけない。でないと、目的なしに漕ぎ出したボートのやうなもので、其處へ行つて何をするのかさへ分らぬから、行くところに忽ち迷ふといふやうなことになる。それではいけない。そこで私は、貯金をするに、三つの必要條件といふものを、こゝにかぞへあげたのであります。

では、其の三つの條件とは如何なることかといふと、先づ、

第一が、數の觀念を養成すること。

第二が、必らず目的を貫ぬくこと。

第三が、安全なる金庫を求めること。

この三條件の内、たつた一つの條件が缺けても、完全な貯金は出来ないものである。碎いていへば、第一によつて、貯金の大切なこと、また、かくも驚くべき數に達するものかといふことを知り、第二によつて、克己精勵、飽までも奮闘努力して、目的に向つて猛進すること、しかして、石の上にも三年の眞精神によつて、辛抱すること、第三には、如何に貯蓄心があつて、辛抱して貯金を續けて見たところで、それを保管する場所が當を得てゐなかつたら、これ恰かも土龍の穴に水を注ぐやうなもので、いくら一生懸命に注ぎ込んで、殆んど底知らずに抜けて行つて了ふものであるから、如何に永い間辛抱しても、それは徒く徒勞となり、水泡に歸するのである。だから此の三つの條件は、必らず備へてゐなければならぬものであります。

然らば、この三條件を完備させるには、どうすればよいか、といへば、それには種々な注意を要する。所謂、前に述べた外出のとき、目的地へ行くのと同じことで、同じ電車に乗るとしても、空いて居るのに乗るにはどうすればよいか、また、何處の停留所が目的が一番近いのか、さうして、一回の乗換で済むか、それとも二回にするか、たつた一つの電車に乗るのでさへ、それだけの注意は必要であります。

まして、大切な、汗と膏の結晶である金を溜めるのであるから、種々の注意を要すること勿論であります。

世間往々にして、第三の條件に不注意の爲めに、不正貯蓄銀行や、或ひは不正利殖會社などに惑はされて、折角溜めた金を溝へ捨てることがある。これ、第三の條件に餘りに無頓着の故から起るあやまちで、甚だお氣の毒に堪へないことだが、亦已むを得ない譯であります。

以下説くところの各項は、殆んど、それに對する注意の數々であるので、大いに戒心張

目して讀んで貰ひたいのであります。

二二二が四、とは小學第一年において、我々が習つた數であるが、何十年と経た今日に至つても、ヤハリ二二二が五にはならない。さりとして、二二二が三とも、教へて居らぬやうである。して見れば、二二二は何處まで行つても四の數であることは、疑ふ餘地がない筈である。即ち永久のこれが眞理なのであります。

さて、二二二が四、二二二が六が永久の眞理であるならば、我々は、何處までもこの九によつて進んで行かねばならぬ。であるとするならば、五圓の收入に對して、五圓の支出が伴へば、残は零であるのは、明らかであり、これ又、永久の眞理なのであります。

さあそこで、私は前にも述べた如く、貯金を始むるにはどうしても、漸を逐うて、積んで行くよりほかに、手段はないと考へる。例へば、五圓働らいた人が、一割づつ毎日積むならば、その人は一ヶ月に十五圓を積んだ勘定になる。もし、二割の一圓づつを積んで行くならば、一ヶ月に三十圓になる。一ヶ月十五圓や三十圓では、ホンの僅かに聞えるが、

これを五年十年と積つたら、それこそ驚くべき数になります。

例へば、一日一圓づつ貯金をすれば、一ヶ月三十圓になるが、それを人間の活動期間の三十年間続けたら、どういふ数になるかといへば、かういふ数字が出ます。(但し年五分の複利)

三年後	一千百六十四圓三十一錢
五年後	二千六十三圓四十八錢
六年后	二千五百五十四圓五十六錢
七年后	三千七十五圓五十三錢
八年后	三千六百二十八圓二十二錢
九年后	四千二百十四圓五十九錢
十年後	四千八百三十六圓六十五錢
十五年後	八千五百六十三圓五十七錢

かくの如く、三十年後には巨額な金になる。しかししてその元金といへば、僅かに一萬八百圓であるに拘はらず、利息は一萬八百五十四圓六十一錢になつてゐる。一日一圓の少額も、かく積つて見ると、實に大きなものではないか、だから、一錢の些といへども、ムダが出来ないのだ。僅かに一錢と一口にいふが、たとひ一錢でも不足をすれば、千萬金といへども、世間に通用はせぬものであります。

たとへば、十萬圓の土地を買つた。しかし惜しいかな、九萬九千九百九十九圓九十九錢はあるが、何としても一錢不足をしてゐるといふときに、それが直ちに十萬圓として通用するかどうか、成程、それは十萬圓に對する僅かに一錢であるから、民間の取引なら、何とか話も付かうが、それにしてからが、一應は斷わりをいはねばならぬ、まして政府に對

二十年後	一萬三千五百七十二圓二十一錢
二十五年後	二萬百三圓四十二錢
三十年後	二萬九千三百四十九圓六十一錢

する金であつたら、たとひ一錢不足をしても、十萬圓の通用はしないのである。九萬九千九百九十九圓九十九錢は、何處まで行つても九萬九千九百九十九圓九十九錢なのである。それだから一錢でも大切なのであります。

よく、一錢ばかり仕方がないといつて、投り出して置くが、イザとなると、一錢が五厘でもなければ通用出来ないのだ。ことに電車汽車に乗る時など、生憎一錢の金がないために切符が買へないで、電車を途中で降ろされて、仕方がなしに、要りもせぬ買ひ物をして漸く一錢の金をこしらへて、電車に乗ることなどがあります。

また、汽車でも、剩錢がないために、たつた一錢あれば間に合ふのに、それがないうために汽車に乗りおくれた、といふこともあるだらう。一錢の大切な事はその通りで、ハガキ二枚買ふには、四錢なければいけない。しかるに、三錢では、何處へ行つても一枚しか買へないのであります。

かくの如く考へて來ると、一錢の微といへども、實にゆるがせには出来ません。

殊に、利息といふ點などからみても、この一錢は、なか／＼重大なものなのである。例へば百圓について、日歩一錢といふのと、二錢といふのでは、大した違ひが出る。成程、それは、たつた百圓といふ觀念から考へるから小さいが、私共、巨額な金を預金者方から預つて居るが、この一錢の違ひが、大したものになるのであります。

私は幼いときに、或人から、かういふ道歌のやうなものを聞かされました。

金といふ字を解剖すれば、人ニハ——が第一よ

鳥渡、どういふのか初めはわからなかつたが、小學校に入學して、金といふ字を書くやうになつて、初めて判然と解釋が出来ました。

成程、つまらぬやうなものであるが、なか／＼昔の人は面白いことをいふたもので、何事にも辛抱は大切であるが、殊に、金には、辛抱が第一であることは、今更いふまでもない位であります。

一口に辛抱といふが、この辛抱の辛いことは、却々容易なことではない。しかし、何を

するにも、何になるにも、この辛抱の洗禮を受け、しかしてこの門を潜つて來なければ、成功の域には出られないのであります。

私が曾て、ニコ／＼主義を唱へた頃『石の上にも三年』と題して、雑誌ニコ／＼に一文を草して載せたことがある。聊さか参考にならから、茲に採録致します。

少くも三年間、石の上に坐つた積りで辛抱すれば、大概の事は成就するものである。もし成就せないとすれば、それは石の上に坐つたのでなく、綿の上に坐つたに違ひない。綿の上では、何年でも坐つて居らるゝ、辛抱といふ程のものでない。誰にも出来る辛抱は、所謂ホントの辛抱にあらず、同じ三年でも、石の上の三年でなければなりません。

試みに、石の上に半日でも坐つて見よ、足が痛くなつてたまつたものでない。それを三年間やるといふのであるから、餘程の難事である。難事なればこそ面白味がある。誰にも容易に出来ないところに價値がある。成功は困難を突破して、初めて得らるゝもの、艱難汝を玉にすといふのであります。

私は、正に人間には辛抱が第一であると考へてゐる。しかし、その辛抱も、意志が弱くは持続出来ないのだから、意志を強くして、さうして、克己の精神を養ひ、つひに成功の域に達せねばならぬと思ふのであります。

貯金の本質としては、何としても金を有利に廻さねばならぬ、といふのではない。飽までも安全確實に保管して置き、イザといふ場合、直ちに引出して、その目的に使用し得らるゝのでないと、完全なる貯蓄とはいへないのであるが、しかし、又一面に於ては、利殖といふことも、全然度外視することは出来ません。

前項に於て『安全なる利殖の研究』の記事中、利廻りの安いところが即ち安全なのである、と述べてゐるが、しからば、如何なるために利廻りが安いのが安全であるかといふことについて、少しく説明しよう。

尤とも事實は、このことを雄辯に物語つてゐるのは、現在、世間で第一流と稱せられつゝある大銀行の預金と、二流三流と目せらるゝ銀行の預金と比較して見ると、直ちに首肯

され得るのである。御覽なさい、一流の銀行の利息は、二流銀行の利息より必らず安いのであつて、その安い一流銀行の方に預金が多く集まるといふのが、何よりの證據である。水は低きにつくといふ古言もあるが、實にその如くで、世間の人はよく盲千人といふが、決してさうではないのである。確に目明は千人以上居るに違ひありません。

また、それと反對に、所謂、二三流にもない、もぐりの金融會社、不正手段の會社は、新聞に堂々と廣告して曰く「吾社は二割に利殖す」などと吹聴してゐる、この位の危険なものはないのであります。

私は、いつも『利殖の高いといふことは、危険であるぞ』といふ信號を掲げてゐるに等しいものである、というて行員を警戒してゐるが、實にこれ位の危険千萬なことはないのであります。

しかるに所謂、世間には、全然かういふ方面には無經驗な、無知識な人が往々あつて、随分大切な金を預けて、後にはつひに一文も取れなくなり、仕方がなしにその筋へ訴へて

出るものがある。最早、さうなつては後の祭、六萬十菊で、警視廳から檢舉の手が出て見たところで、無いものは無い。訴訟しても費用倒れで、ヤハリ取れないものは取れない。つひに大切な金を無くした上に、世間から胡廬の種になる。こんな馬鹿々々しい話しはまたと世間にはない筈であります。

けれども、よく／＼考へて見ると、これは引ツ掛る方にも、よくない所がある。不注意な所がある。何故ならば、大切な貯金を保管して貰ふ、といふことの本質を忘れて、いくらでも餘計な利息を獲らうとするから、その畏にかゝるのであります。

米國のメカニックス貯蓄銀行の廣告を見ると、大きな魚が、釣にかゝつて、水面に引つぱりあげられてゐる畫が描いてある。それに、こんな振るつた文句が付いてゐます。

あはれな魚よ！

曖昧な提案によつて釣らるゝ勿れ。

貴方が凡てを知つて居ないとこへ貴方の金を預け入れる勿れ。

投機を爲す勿れ、金はその方法では得られるものではないから。機会を捉へる人。といつても實は何も策があるのではない。可成り皮肉であるが、確に、これある哉といひたい。

最後は實行

さて、貯金の爲さざるべからざることは、以上の説明で百も御承知になつたことであらうし、また、いかにすれば、最も確實に、且つ有利に貯金し得らるゝか、といふことも了解せられたであらう。しかして、こゝに餘すところの問題は、たつた一つの實行のみであります。

諸君、晝いた餅は口には入らぬものだ。何年見て居ても、腹は充くならない。諸君、私は、貯金を人に勧めるとき、かういふ歌を聞かしてゐる、否、歌といふよりは私共の銀行

の、これが一つの標語となつてゐます。曰く

貯はへは人間萬事の基なり

悟りし時は明日とのばすな

諸君、百千の議論より一ツの實行とは、昔からの諺であります。

成せば成る成さねば成らぬ成るものを

成さぬが多き人の世の中

成る成らざるは、實に諸君の心懸け一つなのであります。

成らざるにあらず、成さざるなり。

と古人は、いろく 人間のするい氣持を喝破してゐる。如何に名論卓説も、實行せねば、晝ける餅に等しいものであります。

以上説くところのものは、多く私の永い間の經驗に基いたものであつて、一つとして實行不可能の理想論や、空想論は交へてゐないのである。即ち、成る成らざるは諸君の實行

不實行にありません。

無論、私の議論は決して名論でもなく、卓説でもない、極めて平凡な議論である。従がつて、世間の人の誰でもが實行し得る所のものであることは請合ひであります。

(體驗人間學)終り

昭和十三年五月十五日印刷
昭和十三年五月二十日發行

「體驗人間學」

定價一圓三十錢

不許複製

著者 牧野元次郎

發行者 伊藤隆文

東京市芝區田村町四丁目十八番地

印刷者 青野仙吉

東京市芝區田村町四丁目二番地

東京市芝區田村町四丁目十八番地

發行所

今日の問題社

振替東京五九七四八番
電話芝(43)三〇〇七番

發賣元大取次

東京堂・東海堂・北隆館・大東館・上田屋・大阪長屋・栗田書店・新正堂(京阪神)
川崎書店・野野書店・金文堂・大塚書局

1940

◇今日の問題社・刊行書目◇

本社出版の單行本は全國の書店にて發賣して居りますが、品切の節は直接本社へ御便宜の方法で御注文下さい。

中日實業副總裁 高木陸郎編 **北支經濟案內** 北支の事業・商賣・生活・旅行の案内書。 價二圓三錢(TT)

池崎忠孝著 **世界に立つ日本** 歐洲の現状を解剖して戰後日本の進路を説く 價一圓(TT)

王子製紙社長 藤原銀次郎著 **事業學・人間學** 徳富蘇峰翁が推奨する處世書。 價二圓三錢(TT)

及川中將序 古澤・西共著 **この海空軍** 海軍航空部隊の發達と上海空爆戰の實記。 價二圓三錢(TT)

後藤朝太郎著 **隣邦支那** 白日下に暴露された現實支那の正體。 價一圓三錢(TT)

野田經濟研究所長 野田田豐著 **戰爭と財産** 戰爭がはじまつたら財産はどうなるか。 價二圓三錢(TT)

不動貯金銀行頭取 牧野元次郎著 **私の處世法** 財界の偉人が體驗を語る處世談。 價八〇錢(TT)

750

100

